

ゴッドイーター 極
東の蒼い閃光の
Testament

ヘタレ少尉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこの神話でも神は世界を創り大地を創りそして人を創ったと言われる、

昔はどこでもそんなのはおとぎ話の次に胡散臭かった、

だけど…… 創る神がいるのなら破壊する神もまた存在していた……

これは全てが神によって創られそして破壊された、

未来の人類の滅亡をかけた永く終わらなき戦いの中、

少年少女たちのテストメント『契約』である……

目次

プロローグ

極東の少年神との契約

1

序章 極東の少年

序章 訓練止めたいお……

20

プロローグ

極東の少年神との契約

少し話をしよう……

え？何で突然話を始めるのかって？まかいことはいいんだ…

全てが神によって創られた世界

その神に破壊されるとは何とも皮肉な物だな
すまない少し話がそれてしまったな

神無月 アオイ そう言う一人の少年がいた
彼は一見見ればただの少年である

だがそんな彼も他の人と違うところがあった
ゴツドイーター

荒ぶる神々を倒しまあ言ってみればヒーローである

さてと前置きが長くなってしまったな

今回はその少年の話をしよう

アナグラ訓練室前

「なんで待ち時間がこんなに長いんだよ」

一人少年が呟く先程からずっと（五分ちよと）

訓練室前のベンチに座っていた

そして

「お待たせしましたそれでは中にどうぞ」

突然中からガシユという音を立て扉が開き女性が出てくる。

それに若干びりびりながら「あ… はい…」と声を小さくして言う

ガシユと音を立て扉が開き少年は部屋に入る

そして…

「ようこそ人類最後の砦フェンリルへ」

中年くらいだろうか？ 男の声が部屋を木霊する

それに少年はまたびびった。

「これより対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』の適合試験を受けてもらう」

「リラックスしたまえその方がいい結果が出るのでね」

(緊張すると言われても…) そう内心思う

「準備が出来たらそこに手を置いてくれ」

そう言われてそこにあつたのは…。

「すげえ……」

思わず声に出してしまった

だが目の前にあるものは世の中の男子が見たら誰だつて興奮する。

「本物の神器だ……」

神器それは荒ぶる神々通称『アラガミ』に対抗すべく

人類が創つた言うなれば人工アラガミみたいなものである、

目の前の神器はチェーンソーみたいな刃をもち鮮やかな蒼の剣であった。

ゴクリ……もし適合に失敗したら……嫌な予感が頭を過ぎる

適合失敗それは神器自体人工アラガミである故神器の柄の部分に触つても身体をオ

ラクル細胞に喰われアラガミ化してしまうだが適合すれば問題ない……はず……。

「すう……ふう……」

小さく深呼吸をする、

深呼吸を何回かして遂に……。

装置の前に立ち手を神器の柄の部分を掴むすると……。

ガシャン！

急に丁度手首の辺りまで挟まれる、
それと同時に。

「ぐ!?!」

とてつもない鈍痛激痛が腕身体中を襲う

その感じはさながら中から喰われてるような

自分の身体の中で何かが暴れているような

まさにそんな感覚だった。

「ぐ・グウ！」

必死に痛みを堪えようと強く歯を食いしぼる

そして。

ふしゆくと言う音を立て痛みが止まる

装置に挟まれた手首からは黒い煙が出る。

「はあ．．．はあ．．．」

今まで感じたどの痛みよりも痛かった

まあ親にゲームのデータを消されるよりはマシだ、

カシャッと音が鳴り挟まれてた手首が解放される

だが手首には……

「なんだ……これ？」

手首に赤い腕輪が付いていた

この腕輪はさっきの激痛の時に身体に入ってきた

オラクル細胞の侵食を止め体内でコントロールする為の物でもある、これは余談だがこの腕輪を付けてると

めっさ服が着にくいらしい。

そして手にはあの蒼い神器が握られていた、一見重そうだが（実際重い）オラクル細胞によって強化された腕力なら軽々と触れる。

ブン！とその勇ましい剣を軽く振ってみる。

（すごい……物凄く手になじむ……）

「適合おめでとう……君がこの支部初の『新型』ゴッドイーターだ……そしてようこそ神無月アオイ」

さっきの中年の男の人が言う

「このあと適合後のメディカルチェックが予定されている」

「始まるまで向こうの部屋で待機してくれたまえ気分が悪いなどの症状が出た場合はす

ぐ申し出るように」

そういう男は去った

「あれ？この神器どうすればいいの？」

何も知らされていないアオイだった…

何か知らんが若い男の人に「そのまま元の所に戻してOKですよ」と言われあの装置の上に置いて部屋を出る

カシヤと扉が開き部屋から出ようとしたその時。

トコトコ…

部屋出て左側から…。

(凄く可愛い子だな…)

歩いて来たのはまるでおとぎ話のお姫様のような

整った顔立ちにスラツと伸びた金色のロングヘア

その蒼い瞳はまるで世界の汚れを知らないような

キラキラと輝いていた瞳だった。

思わず見とれていたら…

「??？」

少女は突然止まり自分の方を向いて近寄って来た

その少女の澄んだ蒼の瞳が自分を見る、

俺は：「な：何？」と少女に向かって言う

そして少女は。

「キレイなヒトミデス：」

少女はそう言う

少女の言葉に思わずドキつとした今まで女の子と殆ど

無縁だった為か思い切りテンパる。

「え、えつ：とあの：その：」

アオイは彼女の顔が自分のすぐ前まで近かすぎ

そのおつきくて柔らかいメロンが自分に当たる。

そして何事もなかったかのように隣の部屋に入っていく

「：：：」

アオイは暫くボーとして

「凄いメロンだなあ：」

そう言つてロビーに向かう

アナグラ内ロビー

ロビーでは結構な人集りが出来自分はエレベーターから降りてすぐの階段を降りると、

入口前のベンチ座る。

さっきのメロン凄かったなとまた思い出す、

妄想に浸ってたら隣に座っている自分と大して変わらない年位の男が、

「ガムくう？」

とガムをクツチャクツチャ噛みながら言う

「いや別に……」と断ると、

「あ……ごめんどつちみち切れてたわ」

そう言つてニカ！つと笑う、

「あんた名前は？」

隣のガム男が聞いてくる、

「…… 神無月アオイだ」

そう無愛想に返す

「そうか俺は藤木コウタよろしくな！」

そう言いまたニカ！つと笑う

だがアオイは（果たして内心どう思っているのやら？）
そう思うのであった

「俺と同じか少し上っばいけど…一瞬とは言え俺の方が先輩って事でヨロシク！」

「ああ…」

暫くして、

カンカンと階段を降りてくる音が聞こえ、

下に向けてた顔を上げる、

そこには。

「！」

降りてきたのは（さっきのメロじやなかった女の子！）

さっきのお姫様みたいな少女とセクスイーな女の人と一緒に降りてきた、

そして急に、

「立て！」

「へ？」

「立てと言っている！」

急に立てと怒鳴った

それで俺とコウタは、

「ハイイ！」

そう叫ぶように言い背筋をピンとのばす、

ガタガタと隣で震えるコウタイやそんな怯えなくても…:

そうしていると怒鳴ってた女の人の隣にいたさっきの少女が俺の隣に立つ。

(彼女もGEなのか?)

そうアオイは思う、

「これから予定が詰まっているので簡潔に済ますぞ、」

それ多分俺のせいだな…: そう内心思う、

「お前たちの教練担当に成った雨宮ツバキだ」

「このあとの予定はメデイカルチェックすませた後基礎体力の強化基本戦術の取得各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらおう」

「今まで守られる側だったかもしれないがこれからは守る側だ」

「つまらない事で死にたくなければ私の命令には全てYESで答えるいいな?」

「解ったら返事しろ！」

「了解!」 「YES」

「早速メデイカルチェックを始めるぞまずはお前だ」

そう言い俺を指差す

「俺ですか？」

「そうだ博士の部屋に一五〇〇までに集まるようにそれまで施設を見回っておけ……
そして： 今日から世話になる通称『アナグラ』だ……」

フェンリル極東支部通称『アナグラ』

極東昔は日本と呼ばれた国で

地球上の極東の位置にある

世界上で最もアラガミとの戦いの激戦区で、

新種もよくこの地域で出るらしい

エレベーターに乗るとウイイインという音と共に体が下がって行く感覚が来る、

アオイはふと思った、

(俺やっていけるかな?)

そう思ったため息を吐く。

榊博士のラボ前

スタスタスタ

アオイはエレベーターを出て真っ直ぐの博士の部屋に行く途中。

「あつ……あの……」

そう小さな声で女性に引き止められる、

女性は自分より少し小さめで多分年上だろう、

緑に少し白っぽい色の髪にフェンリル支給のベレー帽をかぶり余り露出し過ぎない服にさつきの少女より小さいがそれでもなかなかのメロンだ。

「はい?」

そう返すと。

「あつ…… 始めまして台場カノンと言います」

台場カノンと名乗る女性はそう言うのと小さく頭をさげる

こちらも釣られて。

「俺は神無月アオイって言います」

そう言い俺も頭を下げる

「もしかして今日はいった新人さんですか?」

そう聞かれたので、

「はい」と返すと。

「ヤッパリ! 今日新人さんが3人来るって聞きましたから!」

そう言いカノンはキヤキヤと喜ぶ

俺は榊博士の部屋がわからなかったので、

「榊博士のラボはどの部屋ですか？」と聞くと、

「ああメディアカルチェックですね！、それなら真つ直ぐの部屋です♪」そう言い俺はありがとうとお礼を返し榊博士の部屋に入る。

「やあ指定時刻より738秒より早い」

狐目の中年位の男がそう言う

「よく来たね『新型』くん」

そう言うとき眼鏡をクイツと上げた。

「私はペイラー・榊アラガミ技術開発統括責任者だ。以後君とは良く顔を合わせることになるけどよろしくね？」

そう言うときパソコンらしき機械をカチャカチャさせて。

「見てのとうりまだ準備中何だ。ヨハン先に君の用事をすませたらどうかね？」

そう榊博士が隣のいかにも偉そうな人に言う、

そして男の人が喋り出す。

「榊博士。：。そろそろ公私のケジメを付けて頂きたい」

そう博士に言いヨハンと呼ばれた人が俺に向かって喋り出す。

「改めて適合試験ご苦労だった… 私はヨハネス・フォン・シツクザールこの地域のフェンリル支部を統括している」

そう言うのと榊博士が。

「彼も元技術者何だヨハンも『新型』に興味深々なんだ」

「あなたがいるから廃業せざるを得なかったんだ少しは自覚を覚えたまえ…」

「本当に廃業したのかい？」

博士の一言で少し空気が重くなる

「ふう… さてここからが本題だ我々フェンリルの目標を改めて説明しよう…」

「君の直接の任務はここ極東地域一体のアラガミ撃退とその素材回収だが」

「それらは全てここ前線基地の維持と来るべき『エイジス計画』を成功させる為の資源な

r 「スゴイ!!」 んん…

エイジス計画とは簡単に言うところ極東支部沖合付近旧日本海溝付近にアラガミの脅威から完全に守られた『楽園』を創ると言う計画なのだが… 「ほほ〜!!」…

「この計画が遂行されれば人類は当面の間絶滅の危機を免れる事が出来るはず… 「ス

ゴイ!!これが新か!」

ペイラー… 説明の邪魔だ…」

「いやあ〜ごめんつい予想以上の数値に驚いちゃったんだ」

「……ともあれ人類の為だ…… 尽力してくれば……」

そう言われ、

「了解」

そう返すと局長は満足したのか少し微笑み、

「これで私は失礼するよ。ペイラー後で新型のデータを送ってくれ…… では……」

そう言い出て行った。

「さあ準備は終わったそこに横になってくれ」

ベッドに横になり寝ろと言われたので博士のラボにあったベッドで横になり目を瞑る、

「少しの間眠くなると思うが心配しないでいい次目を覚ますのは自分の部屋だ……」

そう言われだんだん眠くなりそこで意識が途絶えた……

自室

気づくと自室のベッドの上に寝てた、

壁に掛かったシンプルな時計を見ると。

「7時か……」

時刻を眩くと起き上がり部屋に設置されたターミナルを見ると一件のメールが届い

てる、

何かと開いたら、

それは開けてはいけなかったかもしれないパンドラの箱だったのかも知れない（メールだが）

メールを見ると、

榊博士からだった、

文を読んでいくと気になる文章があった、

（いやあ〜ごめん〜こちらの不手際で部屋が足りず一人君と同じ部屋で暮らす人がいるからベットがあるのは気にしないでね）そう文が終わっていた、

そう言われると部屋にはベッドが2つあった、

まあ：： コウタの事だろうあの少女では少なからず無いと思いつつベットに横たわる、
（相部屋か：：）そう思いながら目を閉じ浅い眠りについた：：：。

ガサガサと音がする、

まだ少し眠くて重い体を起こすと。

部屋で自分が右でもう一人の方の左のベットに体むけると、

あれ？（コウタってこんな小さかったっけ？）

まだ寝ぼけてるのかと思いい目をこすりながらよく見ると

「オキタデースか？」

カタコトの口調？

金色の髪？

蒼の瞳？

「うえ!？」

驚きのあまりベットから転げ落ち背中強打する、

「大丈夫デースか？」

そう言い少女はしやがみ俺に手を差し伸べる、

俺は「あ： ありがとう？」と言い彼女の手を取り

起き上がる。

「ソウ言えばマダ自己紹介がまだデシタネ」

「ベル・キャリアデスアナタは？」

少女はベルと名乗り

「俺は神無月アオイだ：。もしかして相部屋なった人って？」

俺は恐る恐る聞いてみたら。

「ソウデース！」と案の定予想道理と言うかなんと言うか……
「はあ……」

フェンリルって少し可笑しいと思うアオイであった……

序章 極東の少年

序章 訓練止めたいお.....

訓練室内

「うえあつ!?!」

ブレードを振ったら重さに負け倒れ.....

ホログラムオウガテイルが目の前に.....

「ウアアアアアア!?!?!」

喰われるそこで

「はーい訓練しゅーりよー」

神器整備士リツカさんの声がする。

「ちよとちよとーアオイ君これじゃ訓練にならないよ」

とむくれた感じの音が響く、

リツカさん..... 訓練初日っス..... 正直..... きついつス。

(はあ新型って憂鬱.....)

「はあつ.....」

溜め息を吐くまさか新型だからって……

「新型だから説明できないでーす☆」

と言って説明無しでいきなりオウガテイルで訓練を始めた、

神器は変形しないわオウガテイル切れないわ弾でないわシールド展開しないわ……

ましてはプレデターフォームは暴走して俺を食おうとするわ……大変だったお……
(そう言えばベルはどうだったんだろ?)

そうしてベルが訓練室を出てくるのを待っていて、

待つこと数分

やっと出てきた……

「ようーベル」

俺はベルに何気なく話しかける、

するとベルも。

「h i a オイー！」

と返してくきて俺は早速訓練はどうだったか聞く、

「ウーんとけっこうよかつタトおもうデース！」

後にリツカさんに聞いたがどうやら軽々と振って、
それはもうペンを持つ如く軽々と言っていた...
俺はその後ツバキ教官に絞られた、
しかし新型なら仕方ないよとコウタに言われ、
心が折れました.....

自室 now!

「はああああ.....」

俺はベットの枕に顔をうずめ、
深いため息をつく...

憂鬱だ...

そこにベルが戻って来る

ガシユ!

「ん?」

顔を横に向けベルを見る、

うらやますいなチクシヨウ.....

「どうしたデースか？」

顔を近づけ言うと俺は、

「うお!!」

急に顔を近づけられびっくりして壁に頭をぶつける、

痛い……

「大丈夫デースか？」

そうベルに言われたので「大丈夫だ」と返して俺が返すと自分の方のベットに向かい机に座り何やら書き出す、

彼女が言うに日記だそうだ全て英語で訳わかめだが……

正直まさか部屋が合わずでこんなになるとは

博士の話によると、

「今アナグラは結構ギユウギユウだからね空き次第伝えるよ」と言われたがそれってつまり……他のGEが死ぬって言う事かな？ まあ会ってまだ浅いかなかなか人柄が見えてきた……

てか正直な話コウタと相部屋の方がまだ良かったな……

さあ今日は寝てまた明日訓練だ……

数日後訓練室

「いい？今度は色々調整して見たけど最終的に使えるかそうじゃないかは君の腕次第だよ。」

そう訓練室にリツカさんの声が響く、

神器のコアから変なケーブルみたいなのが伸び俺の腕輪に繋がっている話によると神器を使つて行けば自然と取れるらしい、

ベルは取れたと言っていた....

そう思いながら俺は剣を振る、

ホログラムのオウガテイルは華麗に避ける、

(何だこいつ...？ 勝てる気がしねえ...)

もう一太刀！そう思い更によけた方に剣を振るが、

ヒヨイとかわされた...

(もうだめば...) そう内心思いながら更にオウガテイルに飛びかかるとチェーンソーのような刃はホログラムのオウガテイルの尻尾の部分に振れると、

ザン！と言う音を響かせ反射的にそのまま斜め上に

振ると真つ二つにオウガテイルが割れる、

「え!」俺の急な事によると驚きで変な声が出る、

「まるでバターナイフとバターみたいに切れた…」

リツカさんは結構驚いてるがその勢いで、

「これならガンフォームも行けるね」と言い俺の

神器をガンフォームにさせようとするが…

何度グリップを握っても変形にしないので、

「えい!」とすこし力を入れる形で強く握ると…

ガシャン!と金属が擦れる音と共にロングブレードから

長い銃身のライフルに変わる、

「おお!」それに少し驚きつつもホロオウガテイルを

スコープで覗き頭に狙いを付け引き金を引く、

「くらえ!」

そう言うのと赤い弾丸が回りながらオウガテイルの

ドタマをぶち抜く。

「うわっ!」急に出てきた弾に驚く

「よしよし… 次は…」

そうリツカさんが呟いた後に、

オウガテイルが背後に現れ牙を剥く

「どうつえ?!」

反射的にソードフォームに戻し青くて小柄な盾でオウガテイルの攻撃を防ぐと、
「あらよつと!」そのまま盾でぶん殴る。

ガン!と音を立ててオウガテイルは横になる、

チャンスと思いそのまま神器をプレテターフォームになりグチャグチャと音を立て黒い線が束になり

それは青い神器と裏腹に少し赤み帯びた感じだ。

「食らえ!」

そう言い神器を食らいつかせると

オウガテイルにかじり跡がつき、

神器はクツチャクツチャと音をたて飲み込むすると
体が光り不思議と力が溢れてくる、

これが俗世間で言うバースト状態か...:

そのままオウガテイルを一刀両断し訓練は終了する、
「お疲れ様上出来だよ!」とリツカさんが誉めてくれる

俺はいやあそれほどでもと返すがリツカさんは

「君じゃ無くては神器だよ、流石新型！」

そう言う、

俺はやっぱりか… と思いながらツバキ教官に報告に行く

道中…

「ん？あれアオイじゃん！」

報告の道中コウタが声を掛けてくる、

別に嫌な奴でも無いので普通に返事する。

「ああコウタか…」

素っ気ない返事だが少々これで精一杯だ…

そんな「やあこんにちはコウタくん！」みたいな風に接する訳にもいかんぞ…

「訓練どうだった？」

とコウタが聞いてきたので、

「ああうまくいったこの調子なら本物とも戦えそうだよ」と言うと

「そうか… なら俺も最も頑張るかな！」

そう言いコウタは「じゃあな！」と言い訓練室の方に行く

報告中 now!

自室

今日の訓練で疲れた俺は固いがそれでも俺を包んでくれるベットに体を預けると、

バフウと音をたてる。

今日の疲れを癒すにはちょうどいいベットで色は俺の好きな青だ。

しばらく横になりながら本を読んでもとベルが戻って来る

ガシャ!

「O u a o i . . .」

少し元気の無いベルがふらふらと部屋に入る、

「どうした?」

と声をかけると

「大変デース!」

と急に俯いてた顔を上げこちらを向く、

「今日先輩方にこういわれマータ!」

回想

(知ってるか？新入りのベルって奴)

(あああの可愛い子か？)

(そうだ、あの子バスターらしいんだが)

まるでロングブレードのように扱ってるらしいぜ！)

(まじか!?)

(迂闊に近づくかない方がいいぞ)

(ああ俺のバスターソードが折られるとイヤだしな)

(ああ!?!お前のはショートブレードだろ!?!)

(んだと!?!このロングブレードで精一杯の癖に!)

(ああ!?!)

回想終了

(いや後半何の話だよ!?!)

「ちなみにどこで話していたる」

そう聞くと

「エエーっと確か受付前デした」

(ぜってーアホだな…)

そう確信して更に
フェンリルに來たのを後悔するアオイだった...: